
リリカルなのはHEROS外伝

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはHEROS外伝

【Nコード】

N3545X

【作者名】

ゼロディアス

【あらすじ】

これは「魔法少女リリカルなのはHEROS」の光がない間の空白期の話。

「魔法少女リリカルなのはHEROS」を見ないと分からない内容がありますのでご注意ください。

最初に（前書き）

やっぱり新連載で行く事にします。

最初に

ラン

「はい、始めましたあ、『リリカルなのはHEROS』の番外編ストーリー!」

なのは

「今回は解説などを行い、やって行こうと思いまーす!」

フェイト

「……」 どんよりオーラ。

カズキ

「フェイト、光がなくて寂しい気持ちは分かるが明るく行こうよ?」

はやて

「すずかちゃんとアリサちゃんだって大翔さんとキヨウスケさんいないの我慢して……」

キヨウスケ・大翔

「んっ?」

はやて

「なんでおるん!??」

アリサ

「光以外のメインキャラは全員レギュラー、準レギュラーだからね」

フェイト

「なんで光だけ！？（泣）」

ダイキ

「しょうがないじゃないか。光が9つの世界行ってる間の話僕等に出番無いんだから」

なのは

「ラン、解説お願い」

ラン

「お、おう。まあこの作品は分かりやすく言えば『リリカルなのはHEROS』の番外編を中心にした話で、1話1話主役が違う」

キョウスケ

「ただし、破壊者に出番は無い」

大翔

「フェイトにとっては残念ながら」

フェイト

「orz」

ラン

「第1弾の番外編はこれだあ！！」 列伝の次回はこれだあ！！的な。

黒いゼロが出現？

どっちが強いかという挑戦を受けるウルトラマンゼロとラン！

だが彼には勝つ自信が無かった……。

第1弾『死闘！ ゼロVSダークゼロ！』

第1弾 『死闘！ ゼロVSダークゼロ』（前書き）

「魔法少女まどか マギカ NEXUS」も更新しましたのでそちらもよろしくお願ひします。

OP「すすめ！ ウルトラマンゼロ」

挿入歌「DREAM FIGHTER」

ED「キラメク未来」

暗黒巨人ダークゼロ

破壊獣モンスアーガー

登場。

第1弾 『死闘！ ゼロVSダークゼロ』

ランとなのは、フェイト、はやてはいつものように学校に行き、龍夜、セイナ、ライハ、ネーナ、カズキも入学する事になった。

アホの子は一応ちゃんと入学出来た。

はやてやカズキ、セイナ達はクラスが違い、龍夜は年が違うので上のクラスに入る事になり、授業を受けていた。

「ねーねー、なんで龍夜と同じクラスじゃないの？」

「あのですね、龍夜さんどう見ても私達と年が違うじゃないですか。少しでも年が離れてればこうなりますよ」

セイナのその答えにライハ「ぷう〜」っと頬を膨らませていた。

因みにマテリアルズの事はなのは達の親戚だったり双子の妹だったりという事になっている。

そしてクラスはセイナ達がなのは達のいるクラス、カズキがはやてと同じクラス、龍夜は上の学年という事である。

その頃、なのは達の教室では……。

「……………」

フェイトに元気が無かった。

「ねえ、やっぱり光がいなくなったからフェイト元気無いの？」

アリスが小声でランに尋ねると、ランは「ああ」と答えた。

光は現在9つの世界ウルトラマンと仮面ライダーの世界を旅してる途中である、光とフェイトは恋仲な為、フェイトは寂しがっていたのだ。

(光、早く帰ってきてよ……)

光は学校では別の学校に転校した事になっているが、この世界に戻ってくればまたこの学校へ入学する。

*

放課後、ランとなのはは手を繋ぎながら帰宅をしている途中で、今2人は人気のない橋を渡って歩いてた。

「やっぱりフェイトちゃん、寂しいんだろうね。もし、ランが遠い所行ったら……」

なのははチラッとランを見る。

「大丈夫だよ、光だって言ってる？ あいつは絶対帰ってくるって」

「……うん」

赤い身体に頭部に皿がある「破壊獣モンスアーカー」が突如空中からワームホールが出現し、降り立った。

「ギャオオオオ!!!」

「怪獣だよラン!」

「ああ!」

ランはウルトラゼロアイを取り出すが、その時、視線を感じ振り返ると少し離れた位置に自分達と少し年上くらいの少年がこちらを見ていた。

「なに? あの人?」

少年はウルトラゼロアイそっくりの黒いウルトラゼロアイ「ダークゼロアイ」を取り出し、目に装着した。

「デュワッ!!」

少年の姿は黒い光に包まれ、モンスアーカーの元まで飛んで行き、モンスアーカーの目の前にウルトラマンゼロそっくりの巨人が現れた。

プロテクターと目は紅く、身体の銀色の部分以外は黒く染まったゼロ、「暗黒巨人ダークゼロ」へと少年は変身したのだ。

「あれって……!!」

「ウルトラマン、ゼロ!?!」

人々はダークゼロをウルトラマンゼロと勘違いし、喜ぶ者がいるが

すぐにいつもと違うと気付いた。

「シエア!!!」

ダークゼロはモンスアーガーの顔を蹴りつける。

「グウ!?!」

負けじとモンスアーガーが連続でダークゼロに殴りかかるがダークゼロは余裕で全てを避け、モンスアーガーの背後に回り込んで首を絞めつけ、地へと叩きつける。

「デュツ!!!」

「ガオオ!!!?」

叩きつけたモンスアーガーの頭を掴み、持ち上げてモンスアーガーの横腹を蹴り、腹部に膝蹴りを炸裂させた。

「又オオ!?!」

「ハアア、シエア!!!」

右足に炎をまとわせて繰り出す飛び蹴り、「ダークゼロキック」がモンスアーガーの弱点の頭の皿に炸裂し、皿が割れ、モンスアーガーは力なく倒れこんで消滅した。

ダークゼロは人々に向けてサムズアップをしたことで、人々は彼もウルトラマンだと思い安心感を抱いた。

そして人々から歓声が上がリ、ダークゼロは両手を広げて歓声を受け止める。

「ハッハッハッハ」

*

翠屋へと戻ったランとなのはは……。

「くっそ!! なんなんだあいつは! 人の姿真似しやがって!」

「真似って姿だけだよ……?」

「ちよっくら俺出かけてくる!! あのニセモノ野郎見つくるってやる!」

ランは翠屋を飛びだし、先程の少年を探しに行った。

「ちよっとなん!?!」

ランは川沿い辺りまで走りながら少年を探していた。

「誰がお探しかい?」

ランが振り返るとそこにはあの少年がいた。

「このニセモノ野郎……」

「ニセモノ? バカ言っな。俺もウルトラマンゼロだ」

「ふざけんな! あんなどう見てもニセモノだろ?」

少年は「ふう〜」とため息をつく……。…。

「残念だが、ニセモノじゃない。最も『元』ウルトラマンだが」「なに？」

「俺は別世界に渡る術がある。つまり、俺は別世界から現れた」

少年の話だと、ランがいた世界とは違う世界のウルトラマンゼロで、ランと同じくウルトラマンレオの元で禁句を犯したため修行していた。

だが彼は修行が嫌で修行から逃げ、ある星で「闇」を自分のものにした。

それがあの姿、ダークゼロである。

「んで、俺は力をもっと求め、ダークゼロになった際に別世界に行ける能力を見に付け色んな世界を周りながら強い奴を倒し強くなり続けた」

「で、次のターゲットがこの世界って訳か」

少年は「そうだ」と答え、ランを指差す。

「ホントは破壊者とかいう奴と戦いたかったが不在みたいだからその師匠と言われてるゼロ、お前に決闘を申し込む！！」

そついうと同時に少年はランに向かって一瞬で近づき、ランの胸倉を掴んで放り投げる。

「ッ！？」

地面に叩きつけられるラン。

「ぐあつ!? いった〜!?!」

「もし断ったら、怪獣を送り続けて挑発を繰り返す。決闘は今日の夕方5時だ」

少年はそれだけ言うと去っていきこうとする。

「そうだ、俺の名前を覚えてやる。『もろほし諸星レイヤ』だ」

名乗った後、レイヤは歩き去った。

(あいつ、俺より強い。今の俺じゃ……)

ランはその場に座り込む。

「ラン！」

とそこへなのはが駆けつけた。

「なのは……」

「どうしたの? 元気無さそうな顔だけど……?」

なのはがランの隣に座りこむ。

ランは先程の事をなのはに話してみた。

「そんな事で落ち込んだの?」

「そんな事って……、もし、俺が負けたらって思うとね……」

なのはが突然ランの両肩を掴み、顔を近づける。

「はっ！？ ちょ、なのは！？／＼／＼」

「えい！」

顔を真っ赤にしてるランだが突如なのはがランに「俺は石だ、石頭
だあ！！」とか言ってる人波の威力の頭突きを炸裂させた。

「アダア！？」

「ランらしくないよそんなの！ ランはいつも自信满满で、そんな
ちゃんと戦う前から諦めてどうするの！？ ランはランらしく、何
時も通りに戦えばいいんだよ、ランらしくー！」

なのはのその励ましに、ランは笑みを溢し、なのはを抱きしめる。

「ふえっ／＼／＼」

「ありがとな、なのは」

「う、うん／＼／＼」

もうすぐ約束の時間、ランは走り出す。

そして時刻が丁度5時になると、ランとレイヤは人気のないある場
所で再び顔を合わせ、ランはウルトラゼロアイ、レイヤはダークゼ
ロアイを取り出して目に装着した。

「デユワッ！ー！」

ランはウルトラマンゼロ、レイヤはダークゼロに変身した。

「さあ、おっばじめおっせー！ー！」

ゼロとダークゼロの死闘が始まる。

「デアッ！」

「デュア！！！」

ゼロとダークゼロの蹴りが同時に炸裂するが、威力はダークゼロの方が上であり、足にダメージを負うゼロ。

「デュツ！？」

「デアッ！！！」

ダークゼロがゼロの肩を掴み、膝蹴りをゼロの胸に叩きこんでゼロの顎にアッパーを決める。

「デアッ！！！」

「グアッ！！！」

ダークゼロの攻撃に倒れこむゼロ。

「どうした？ この程度か！！！」

ゼロを無理やり立たせ、ダークゼロは何度もゼロの顔を殴りつける。

「ぐっ！？ がはっ！？」

民間人などはなぜゼロとダークゼロが戦ってるのか不明であり、困惑していた。

倒れこんだゼロを両手を広げ、「ハハハハ」と笑いながらゼロを蹴

りあげるダークゼロ。

「ングツ!?!」

ゼロの頭を掴み、ゼロの腹部を殴りつける。

「野郎!! シェア!!」

ゼロはジャンプしてダークゼロに飛び蹴りを繰り出したがダークゼロはゼロの足を掴んで投げ飛ばす。

「ぬわあ!!?!」

次にゼロはダークゼロに殴りかかるもダークゼロは避けてゼロの背中を蹴りつけ、ゼロとダークゼロは互いに同時に両腕をL字に組んでゼロは必殺光線「ワイドゼロショット」、ダークゼロも必殺光線「ダークゼロショット」を同時に発射。

威力を高めるゼロだが、ダークゼロの方が威力は上でゼロは吹き飛ばされる。

「デュワツ!!?!」

押されっぱなしのゼロ、なのはは橋の上で戦いの様子を見ている人々に呼びかけた。

「皆さん、あつちのゼロを応援しましょうよ!! あの黒いゼロの戦い方は、自分の強さをただ自慢してるだけの戦いです!!」

なのはのその呼びかけに、確かにそうだと思い始める人々。

「ウルトラマンゼロは、そんな自慢するような戦いは絶対にしない
!!! ゼロ、頑張つて!!!」

なのはの声援を受けるゼロ、さらに次々と人々の声援がゼロに送られる。

「頑張れウルトラマン!!!」
「ゼロー!!!」

それが目障りなのか、ダークゼロは人々を睨むように見る。

ダークゼロはゼロを抑えつけて何度もその顔を殴るが、途中ゼロに拳を受け止められる。

「へっ、やるじゃねえか……」
「なに!?!」

「だがな、自分の強さを自慢するような野郎が俺に挑もつなんて…
…2万年早いぜえ!!!」

ダークゼロを突き離し、廻し蹴りを叩きこむゼロ。

「ぐっ!?! デュア!!!」

ダークゼロは頭にある2本のブーメラン「ダークゼロスラッガー」をゼロに投げ、対するゼロは頭の上にある2本のブーメラン「ゼロスラッガー」をダークゼロスラッガーを弾く為に投げ、互いのスラッガーが激しくぶつかり合い頭の上に戻ってくる。

「デュア!!!」

ゼロに殴りかかるダークゼロだがゼロは避け、ダークゼロの背中に足を振り上げてそのままダークゼロの背中に思いっきり足を振り下げて蹴りつけ、倒れこんだダークゼロを両腕で逆さに持ち、高く飛び上がってパイルドライバーの様な動作でダークゼロを頭から地面に叩きつける「ゼロドライバー」を炸裂させる。

「でりゃあああ!!」

「ぐわあああ!!!?!」

「うわっ、いたそ〜」

なのはは頭を押さえてそんな事を呟く。

「ぐっ……こんの野郎、よくもやりやがったなあ!」

頭からダークゼロスラッガーを手にとり、ゼロに突っ込んで行く。

対するゼロは頭のゼロスラッガーを手にとり、融合させ三日月型の剣「ゼロツインソード」へと変える。

「フン、シエア!!」

ゼロはこちらへ接近するダークゼロに向かってゼロツインソードを構えてこちらにも突撃、そして腕を伸ばし、高速でドリルのように回転しながらゼロツインソードで敵を斬りつける「プラズマスパークスピン」を繰り出す。

「ブラックホールが、吹き荒れるぜえ!!」

ダークゼロとぶつかり合うと、ダークゼロは吹き飛び、遠くへ飛ん

で行きながら消え去った。

「ぐわああああ!!!!?」

「シエア」

人々にサムズアップを向け、なのはの方をゼロが見ると2人は頷き合い、ゼロは空へと飛び去った。

「デアツ」

その後、ゼロはランの姿に戻り、なのはの元へ。

そして先程の場所で待っているなのはにいきなりなのはを抱きしめるランだった。

「ふにゃ!?!?!?!」

「有難う、お前が励ましてくれたおかげだよ」

「お、お礼なら抱きしめる以外がいいな?!?!?!」

「えっ?」

なのははランから少し離れて自分の唇に指を押しあてる。

「ダメ、かな?!?!?!」

上目遣いでランを見るなのはに、ランは胸がキュンッとときめくが……。

(どういう意味だ?)

意味を全く理解していなかった。

「意味、分かってないでしょ？」

頬を膨らませながら聞くなのはにランはギクツとなってしまう。

なのははランの肩に手を置いて背伸びし、ランの口に自分の唇を軽く当てると、すぐに離れる。

「……………ッ／／／／」

「……………」

啞然とするランと顔を真っ赤にするなのは。

「ファーストキスだからね？／／／／」

その言葉の意味はランは理解し、一気に顔を真っ赤になった。

なのはは恥ずかしさのあまり翠屋まで走り出し、ランはその場に取り残され、顔を真っ赤にしたままだった。

*

その頃、レイヤは……………。

「イテテ……」

ボロボロの状態でレイヤはある家の前、というか龍夜とマテリアルズが住んでる家の前で倒れこんでいた。

「大丈夫ですか!？」

そこへ自分を心配するようにセイナが声を慌ててかけた。

(…………可愛い／＼)

セイナの顔を見るとレイヤは顔を赤くし、起き上がる。

「ああ、平気平気……イッ!？」

怪我をしている肩を抑えるレイヤ。

「怪我してるんですね、すぐに手当てしますから待っててください」
セイナにそう言われ、無理やり家の中へと連れて行かれるレイヤだった。

*

次回予告

ウルトラマンゼロ

「さて、中々の強敵だったダークゼロだが、ただ強さを求めるのは本当の強さとは言わない。また戦う事になっても俺は絶対負けねえ！ さあて、次回はコレだあ！！」

月蝕の剣士ジャークムーンが鳴滝によって呼び出され、ジャークムーンは人々を攫う。

その中にはネーナもあり、異変に気付いたカズキとはやてが助けに行き、さらには……。

ゼロ

「次回！ 『アイツがライバルだ！』」

第1弾 『死闘！ ゼロVSダークゼロ』（後書き）

このレイヤはゼロSTSの零夜に比べると熱血バカ&子供っぽい個所ありという相違点があります。

予告は列伝風に。

レイヤが連れてきたモンスアーカーは知り合いに頼んで洗脳兵器を……。
レイヤが作れる訳無いです、バカの子なんですからw

第2弾 『ジャークムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』 (前書き)

OP・挿入歌「GO！ リユウケンドー」

ED「ずっとずっとずっと」

タイトル変更しました。

第2弾 『ジャークムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』

その日、月は明るく輝きを放っていた。

八神家では鳴神兄弟はやてに守護騎士達が夜空を見上げている。

「綺麗な月やな〜」

「ええ、主」

上から順にはやてとシグナムが喋る。

「月……か」

カズキは月を見上げながらあることを考えていた。

「カズキ、もしかして彼のことを考えていたのかい？」

ダイキの言葉にカズキは首をゆっくりと頷かせる。

「彼って誰だよ？」

ヴィータの問いにカズキは答える。

「僕と剣を交えた剣士…… 『ジャークムーン』だよ」

「ジャークムーン」とはカズキやダイキがいた世界にいた怪人であり、「ジャマンガ」と呼ばれる怪物達の一匹なのだが、それ以前にジャークムーンは真の剣士であった。

彼は剣士としてカズキ……ゴツドリユケンドーと何度も剣と剣で戦い合い、敵味方の関係を超えた「絆」が出来始めていた。

だが、そこにダークザギが介入し、自分達の世界を滅ぼしたのだ。

皮肉にもジャマンガ達が復活させようとしていた邪悪な「大魔王グレンゴースト」はジャマンガの幹部もろとも滅び去った。

「でも僕はジャークムーンはどこかで生きてる気がするんだ。あ
の世界にいた仲間達も」

月を見上げるカズキはどこか寂しそうに、懐かしそうな顔をしてい
た。

「少なくとも私等はいなくならんよ?」

カズキの手を優しく握るはやて。

「はやてノノノ」

「お熱いね、2人さん」

ダイキはカズキとはやてを茶化す様に言ったのだった。

*

その頃、ある場所で鳴滝は黒い月の剣士「ジャークムーン」と話しかけていた。

「分かっているな、破壊者の仲間達を叩き潰すんだ」

「リュウケンドーもいるのだから？ 腕がなる……」

ジャークムーンは鳴滝に背を向け歩き始める。

さらに別のある工場の近くの場所で、男性が1人夜道を歩いていると突然ジャークムーンが現れる。

「ひいいー!!?」

当然ジャークムーンを見て驚く男性。

「貴様、リュウケンドーの居場所を知っているか？」

「りゅ、リュウケンドー!? なんだよそれ!?」

「知らぬか、ならば貴様に用は無いな」

ジャークムーンは水晶のようなものを出すとその中に男性は吸い込まれてしまった。

「うわあああー!!!?」

とそこへ……。

「貴様、なにをしている？」

偶然にもネーナが通りかかっていた。

なぜこんな夜道を歩いていたのかというとライハと喧嘩した為。

「お前は……確か破壊者の一味だったな。お前に聞きたいことがある。リュウケンドーはどこだ？」

「教えてどうする？」

「決まっている、倒す……ただだ」

「知らなかったら？」

ネーナは既に魔導師姿に変わっており、エルシニアクロイツというデバイスも構えている。

「どの道貴様も倒される様に言われているのでな」

ジャークムーンは「暗黒月蝕剣」という黒い剣を取りだしてネーナに襲い掛かる。

「三日月の太刀!!」

三日月型の斬撃をネーナに放ったがネーナは飛行して避け、空中から魔力弾「エルシニアダガー」を連続でジャークムーンに発射するがジャークムーンは剣で全てを弾き落とす。

剣をネーナに向けるジャークムーン。

「大人しくリュウケンドーのいる場所まで案内しろ」

「仲間を売る気などないな。貴様如き、我一人でも倒せる!!」

素早くネーナはジャークムーンに接近し、ジャークムーンは構えるが一瞬でネーナはジャークムーンの背後に回り込みエルシニアクロイツをジャークムーンに振りかざしジャークムーンにダメージを与

える。

「うぐつ!?!」

「エルシニアダガー!?!」

再びエルシニアダガーをジャークムーンに放ち、ジャークムーンはさらにダメージを受ける。

「まだまだあ!?!」

ネーナはジャークムーンに接近し、エルシニアクロイツを振り上げるが、その前にネーナの方に振り返ったジャークムーンにエルシニアクロイツを掴まれる。

「なっ!?!」

「生憎だが、私は貴様に倒される覚えは無い。私を倒せるのは、リュウケンドーだけだ」

「うわあああ!?!?!?!」

ジャークムーンの取りだした水晶に吸収されてしまったネーナ。

「ふん」

ジャークムーンはそのままどこかへ歩き去ってしまった。

だが途中、ジャークムーンは足を止めてあることを考える。

(いや、待てよ。わざわざ探さ無くとも魔弾龍が私の気配を感知してリュウケンドーを私の元まで案内するのではないか?)

ジャークムーンはある建物の屋上に飛び上がり、しばらく待っていることに。

するとジャークムーンの予想通りゲキリュウケンがジャークムーンの気配を感じてカズキをここまで案内してきた。

『まだ近くにいろぞ、カズキ』

「ああ、あいつの気迫を感じる」

カズキはジャークムーンが飛び乗った建物を見上げるとその屋上に自分を見降ろすジャークムーンの姿が。

「久しいな、鳴神!!」

「ジャークムーン、お前生きてたんだな」

「貴様と決着をつけるまでは死んでも死にきれん」

このジャークムーンの言葉で自分の世界にいたジャークムーン本人だとカズキは確信。

「ああ、相手になってやる!! ゴッドゲキリュウケン!!」

ゴッドゲキリュウケンをブレスレットから剣を盾に収めた様な「変身待機状態モード」にさせ、ゴッドリュウケンキーという鍵をゴッドゲキリュウケンに差し込む。

「ゴッドリュウケンキー、発動!!」

『チェンジ・ゴッドリュウケンドー』

「撃龍変身!!」

盾から龍の顔がある剣の形をしたゴッドゲキリュウケンを引き抜く

と青い龍が剣先から飛び出し、龍はカズキの身体に降り注ぎ、青と白と金の色を持つ龍の剣士、「魔弾剣士ゴッドリュウケンドー」に変身を完了させる。

「ゴッドリュウケンドー、ライジン!!」

「行くぞ、リュウケンドー!!」

「おう!!」

ジャークムーンは建物から飛び降り、ゴッドリュウケンドーと戦い合い、誰もいない工場の中へと入り激闘となる。

「はあ!!」

ジャークムーンはゴッドリュウケンドーに斬りかかるが、ゴッドリュウケンドーはゲキリュウケンで受け止め、盾を装備した左腕でジャークムーンの腹部を殴りつける。

「ぬお!? 三日月の太刀!!」

「魔弾斬り!!」

三日月の太刀を放つジャークムーンと、威力が弱くなったゲキリュウケンの刃を光らせて敵を切裂く必殺技「魔弾斬り」を互いに炸裂させ、どちらも相殺される。

その際煙が発生し、ゴッドリュウケンドーは煙を払いのけるとそこにはジャークムーンはいなかった。

「どこ行った!?!」

「こっちだ!!」

ゴッドリュウケンダーの背中を剣で斬りつけるジャークムーン。

「ぐわあ!?! この野郎!?!」

ゲキリュウケンをジャークムーンに振るうがジャークムーンは霧のように消え、また背後から斬りかかるがゴッドリュウケンダーはゲキリュウケンで防ぐ。

「なに!?!」

「同じ手が通用するかよ!」

ジャークムーンを押し返してゲキリュウケンでジャークムーンを斬りつけるゴッドリュウケンダー。

「ぬわあ!?!」

「まだまだこれからだ!」

とそこへ、恐らくカズキを追って来たのだろうはやたとシグナムが駆けつけた。

「カズキ!?!」

「主、今カズキの加勢に……」

シグナムがゴッドリュウケンダーに加勢しようとしたがゴッドリュウケンダーは「来るな!?!」と叫ぶ。

「ッ!?!」

「なんでや!?!」

「こいつがさっき言ってたジャークムーンなんだ! こいつとの勝負は……俺だけでいい!?! そうだろ、ジャークムーン!?!」

「その通り、正々堂々と戦い勝利する！ 我等の戦いに手を出す者は許さん！」

だがここでジャークムーンは自分のやった行為を不思議に思い始めていた。

（なぜ私は水晶に人を閉じ込めたのだ？ そもそも私はリュウケンドーと戦えばそれだけいい、他の奴など……）

その様子を影から見ていた鳴滝は、ジャークムーンの異変に気付き舌打ちをする。

「ヤプール」

鳴滝が「ヤプール」と口にすると彼のすぐ近くに時空に亀裂が入りそこから黒ずくめの男性が姿を見せる。

男性はかつて「ウルトラマンエース」「ウルトラマンタロウ」「ウルトラマンメビウス」に何度も倒されては甦る怨念体「異次元ヤプール」である。

「奴にマイナスエネルギーを送り、剣士としての誇りを捨てさせる」「分かっている、剣士の誇りなどという下らんものを持ちおって。ただの魔物が」

ヤプールはジャークムーンに向けて紫色の光弾を放つと、その光弾はジャークムーンの背中に直撃。

「ぐわああ……!?!?」

「ジャークムーン!?!?」

一瞬ジャークムーンは倒れこむが、すぐに起き上がる。

「おい、大丈夫か？」

「リュウケンドー、これを見る」

ジャークムーンが見せたのは水晶に閉じ込められた人々だった。

「なに！？ お前また……ッ！」

「これを割られたらこの中にいる奴等は死ぬ」

はやてとシグナムは水晶をよく見るとネーナが囚われているのも分かった。

『くそ、ここから出せ塵芥！！』

「どこが正々堂々やねん！！」

「剣士の風上にもおけん！！」

はやてとシグナムがジャークムーンに対して怒鳴るが「割るぞ？」と脅され動けなく。

「ジャークムーン、どうして……。正々堂々戦おうって言ったじやねえか！」

「満月の太刀！！」

満月の形をした斬撃をゴッドリュウケンドーに喰らわせるジャークムーン。

「ぐわあああ……！！？」

さらにジャークムーンの剣での攻撃を防がずに何度も攻撃を受ける
ゴッドリュウケンドー。

「おわああ!!?」

「反撃すれば水晶を割るぞ」

そう脅され、ゴッドリュウケンドーはまともに戦えなかった。

だがその時……。

「ダブルショット!!」

ジャークムーンの水晶を持っている右手以外を正確に捕え、強力な
銃撃をジャークムーンは受ける。

「うおっ!?!」

その際水晶を手から放り投げる様に落としてしまっが、落下する前
に赤い線に銀色の身体の龍の様な戦士「魔弾銃士マグナリュウガン
オー」が現れ水晶を掴み取る。

「マグナリュウガンオー、ライジン!!」

「マグナリュウガンオー!?!」

マグナリュウガンオーの登場に驚く一同。

「久しぶりだなあ、カズキ!」

「まさか、オッサン!」

「オッサン言うな!」

どうやらカズキの仲間らしい。

「カズキ、あいつはもうお前の知ってるジャークムーンじゃない。魔物だ……」

「だけど……」

『その通りだカズキ、奴はもう殆ど魔物の心に支配されている。』

それなら支配される前に、倒すのがジャークムーンにとってもいい筈だ。完全な魔物になることをあいつが望むと思うか?』

ゲキリュウケンのその言葉にゴッドリュウケンドーは何も返せなかった。

「分かった」

そこへ魔導師服になったはやてとシグナムが駆けつける。

「ジャークムーン、行くぜ!」

水晶を安全な場所に置くとゴッドリュウケンドー、マグナリュウガンオー、シグナム、はやては並び立つ。

その時だ、計画が失敗した為鳴滝は灰色のオーロラを出現させ、虫のような鋼の身体を持つ魔物「レプトリックス」を出現させ、ゴッドリュウケンドー達に襲いかからせる。

「おわあ!」

ゴッドリュウケンドー達はレプトリックスの攻撃を避け、マグナリュウガンオーは「俺に任せろ」と言いレプトリックスに向かい走って行く。

銃型の龍の顔がある「ゴウリュウガン」と銃型のもう一つの武器「マダンマグナム」を構えてレプトリリックスに銃弾を撃ちこむ。

「ダブルショット!!」

レプトリリックスはそれを鬱陶しく思い、長い脚を使ってマグナリユウガンオーに攻撃して来るがマグナリュウガンオーはジャンプして避け、レプトリリックスの背中を踏み台に背後に回る。

「マグナゴウリュウガン!!」

『マグナパワー』

ゴウリュウガンの先にマダンマグナムを合体させ、「マグナゴウリュウガン」にし、1つのキーをマグナゴウリュウガンに差し込む。

「ファイナルキー、発動!!」

『ファイナルクラッシュ』

「マグナドラゴンキャノン……発射!!」

マグナゴウリュウガンの銃口から炎が飛び出し、その炎は龍の形となってレプトリリックスを飲み込み、レプトリリックスは爆発して焼き払われた。

『ターゲット、完全消滅』

「ジ・エンド」

ゴッドリュウケンドーはジャークムーンの剣裁きを避け、右からシグナムがレヴァンティンをジャークムーンに向けて振り下ろすがゴッドリュウケンドーの首根っこを掴んでゴッドリュウケンドー盾に

する。

「うわあ!!!?」

盾にされたゴッドリュウケンドーは勢いの止まらないシグナムに斬りつけられる。

「すまん、カズキ!」

「2人とも離れて!!! ミストルティン!!!」

最大7本の光の槍をジャークムーンに放つはやてだが、ジャークムーンは満月の太刀や三日月の太刀で全て弾く。

「あいつ、あんなに魔力使って大丈夫なのかよ!?!」

「弱い弱い、この程度か?」

ゴッドリュウケンドーの元にシグナムとはやてが駆け寄る。

「確かに、鳴神が認めるだけはあるか……!」

「こうなったら、2人とも、魔力を俺のファイナルキーに注いでくれ!」

「「えっ?」「」

ゴッドリュウケンドーに突然そんなこと言われて、戸惑うはやてとシグナム。

「力を1つにするんだよ、頼む!」

「分かった、シグナムもお願いな?」

「はい」

ゴッドリュウケンドーはゲキリュウケンの持つ所を盾に収めるようにはめ込み、1つのキーを取り出し、キーにはやてとシグナムは手をかざして魔力を訳与える。

「何をする気が知らんが……」

ジャークムーンは今の内に攻撃を仕掛けようとしたがマグナリュウガンオーの銃撃で阻まれる。

「貴様」

「よし、充填完了！！ 魔力ファイナルキー、発動！！」

ゲキリュウケンにキーを差し込ませる。

『ファイナルクラッシュ』

「剣士！！ 魔弾龍！！ 夜天の主！！ 烈火の将！！ 4つの力が今1つとなる、四位一体！！ 龍王！！ 魔弾斬り！！！！」

ゴッドゲキリュウケンを振りおろすと剣先の刃から通常は1体だが、はやてとシグナムの魔力を訳与えられたので青い龍が3体飛びだし、通常の3倍の威力を誇る「四位一体・龍王魔弾斬り」をジャークムーンに放ち、ジャークムーンは剣で防ぐが、耐えきれず吹き飛ばされ爆発を起こした。

「ぐわああああ！！！！！！？」

「ジャークムーン、安らかに眠れ……」

ゴッドリュウケンドー、マグナリュウガンオーは変身を解き、はやてとシグナムも元の格好に戻る。

マグナリユウガンオーに変身していたのは15歳くらいの少年であり、サングラスをかけていた。

ジャークムーンが消えたことで水晶から人々が放りだされる様に解放される。

「おわあ!?!」

ネーナも同じく放りだされる様に飛びだしたが偶然にもマグナリユウガンオーに変身していた「不動銃一」ふどうじゅういちにお姫様抱っこする形で受け止めた。

「おっと」

「なっ…… / / / 離せ塵芥!! / / / /」

顔を真っ赤にしたネーナは銃一の顔面に強烈なパンチを叩きこんだ。

「ぐぼお!!?!」

*

ヤプールの次元の狭間では、ヤプールが寸前の所でジャークムーンを救っており、次元の狭間にジャークムーンは生きていた。

実はあの時、ジャークムーンが「死んだように」見せかけていたのだ。

爆発はヤプールが作り出した幻影である。

「助かったぞ、ヤプール」

「礼には及ばん、だが次は……」

「分かっている、次こそはリュウケンドーを倒す……！」

*

そんなことは知らないカズキ達はそれぞれ家に帰り、銃一も行く所が無いので八神家に住むことになった。

「そういえばオッサン、どうやってこの世界に？」

ダイキが銃一に尋ねてみると……。

「オッサン言うなダイキ、アンタの方が年上だろ。俺は気付くとこの世界に来ていてな、あちこち旅していたんだ。それでさっき偶然お前達を見つけたという所だ」

一方、カズキはソファに座って少し沈んだ様子。

「カズキ……」

はやてはカズキを心配そうに見ており、カズキもそれに気付きはやてを自分の膝に乗せる。

「ひゃっ／＼／＼」

「大丈夫、僕は平気だから」

笑顔を自分に向けるカズキに、ドキッとしてしまったはやてだった。

（有難う、はやて）

*

ウルトラマンゼロ

「月の剣士、ジャークムーン。心の殆どを魔物の心に支配されている状態になってしまったが、その腕は確かなものだ。果たしてジャークムーンとカズキが再会する時、どうなるのか……？」

次は原作の設定を変え、マテリアル事件から数カ月後になのはの『あの話』をやります。

ゼロ

「さあて、次回はコレだア！！ 魔法の訓練を無茶してやるのはとフェイト。ある無人世界でロストログアの回収に向かうが……、2人の前に金髪の女性が現れる。次回！！ 『別世界の絆の巨人』！！」

第2弾 『ジャークムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』 (後書き)

次回もタイトル変わるかも。

第3弾 『星の破壊者』（前書き）

予告と違い内容になりました。

もう予告無し！

なお、今回は????さんのキャラの「平賀サイト」がきます。

OP「JIKU」未来戦隊タイムレンジャー」

ED「時の彼方へ」

宇宙工員ケサム

宇宙工員ケルス

登場。

第3弾 『星の破壊者』

とあるの森の中、黒い髪に背中に剣を背負った青年「平賀^{ひらが}サイト」
がその森の中に迷い込んでいた。

「なあ、デルフ？」

サイトは背中に背負った剣「デルフリンガー」こと「デルフ」に話しかける。

「相棒、お前の言いたいことは分かるぜ……」

そして2人（？）が声を揃えて叫ぶ。

「「ここ何処だああああ!!?!?」」

サイトはこの世界の人間では無く、別の世界の者であり、ランと同じ「ウルトラマンゼロ」である。

その森の中で、空中に穴が空き、複数の光が地上に降り注いだ。

その内の1つは地上に「ドスン!」と大きな音を立てて落ちた。

「今、なんだか光が見えたけど……」

気になったサイトは光が落ちた場所に向けて歩き始める。

数分前、フェイトとダイキもこの森に来ており、キャンプをしていた。

「少しはこれで君の心の穴を埋められればいいんだけどね……。
森の自然で心を安らげる」

「……はい、大丈夫です」

しかし、フェイトはやはり暗い表情をしている。

「いい加減暗い表情をするのはやめたまえ、何のために君を此処に連れて来たと思ってるんだい？」

「あつ、すみません……。 もう大丈夫です」

笑顔をダイキに見せるフェイトだが、ダイキは「やれやれ」といった表情だった。

そして先程の光が降ってきたのを目撃したダイキとフェイトは気になった為調べに向かうことにした。

*

その頃、サイトは以前自分の世界でも戦ったことのある「宇宙工作員ケサム」と同族の宇宙人の戦闘員がサイトの前に2人立ちはだかつた。

「こいつ、ケサム!？」

「いや、恐らく同族だろうぜ」

サイトは一瞬ケサムだと思ったがケサムで無いとデルフが判断。

「一瞬驚いたけど、確かにな」

戦闘員はこちらに敵意をむき出しである。

「貴様、この星の人間か」

「我々の姿を見たからには生かしておく訳にはいかない。 運が無かったと思うんだな」

腕にある装備から光弾をサイトに発射するがサイトは素早く避けてデルフを引き抜く。

「やめろ！ 俺はお前達と争うつもりは無い！」

サイトの訴えなど無視して戦闘員は光弾をサイトに放とうとするがその時、戦闘員2人に何者かが放った銃弾が当たり、2人の戦闘員は倒れこんだ。

サイトは後ろを振り返るとそこには銃型の武器「ホロスナイパー」を構えた男性がいた。

「貴様、地球人か。 悪い事は言わん、さっさとこの森から出て行け」

サイトはその男がすぐに地球人でないことが分かった。

「アンタ、なんで撃つたんだ!？」

「よく見る、そいつ等はロボットだ。 やれやれ、俺はもう戦いは御免だと言うのに、ウオフ・マナフはそんな簡単にはやめさせて貰えないか」

男の言ってる意味はサイトは分からなかったが、ここが地球なことは分かった。

だが彼のいた地球かどうか……。

「ここは君のいた地球じゃないよ」

突然サイトは誰かに話しかけられて振り返るとそこにはダイキとフエイトがいた。

「平賀サイト……いや、別の世界のウルトラマンゼロくん」
「えっ!？」

サイトは驚いた、宇宙人なら兎も角初対面の地球人に正体を見破られるとは思っていなかったからだ。

「そこにいるのは宇宙連合ウオフ・マナフのインパクター星人、
『ロギア』だね？」

「ほう、お前は何者だ？」

「ただの通りすがりさ」

とそこへ先程の戦闘員と同じ姿の別の戦闘員が彼等の周りを囲む。

フエイトはここはバルディッシュよりもタイムファイヤーの方が有効だと思いブイコマンダーを口元に近づけ、ダイキはディエンドライバーにカードを装填し、ロギアはカードの様な物を出して自分の

顔の前に掲げる。

「タイムファイヤー!!」

「変身!!」

『カメンライド・ディエンド!』

真紅の未来戦士「タイムファイヤー」、シアン色の「仮面ライダーディエンド」、漆黒の戦士となった「インパクター・ロギア」にそれぞれ変身する。

「なっ、あなた達一体……?」

サイトは今まで彼等の様な戦士達は見た事が無い。

「ここは君がいた世界とは別の世界、もちろん君のいた地球でも無い」

「DVバルカン!!」

タイムファイヤーは銃型の「DVバルカン」の銃弾が戦闘員達を撃ち抜いて行く。

「「ぬわああ!!?」「」

他の戦闘員達が光弾をサイトに放つが、サイトは避けながら戦闘員に接近してデルフで戦闘員達を斬りつける。

「おりゃああ!!」

「フン!! ハア!!」

ロギアに至っては武器は使用せず、戦闘員の腹を殴りつけ、背後に

いた敵を蹴り飛ばし敵の攻撃を一切受けつけなかった。

「流石はロギアだね」

『アタックライド・ブラスト!』

ディエンドは複数の銃弾「ディエンドブラスト」を戦闘員達に発射していき、破壊する。

だがその時、戦闘員の放った光弾がタイムファイヤーに直撃し、崖の近くにいた為崖から落ちてしまう。

「きゃあああ!!?!」

「フェイト!!」

ディエンドはカードを3枚ディエンドライダーに装填して引き金を引く。

『カメンライド・フォーゼ! オーズ! W!』

複数のシルエットが重なって3人のライダー、「仮面ライダーフォーゼ・ベースステイツ」、「仮面ライダーオーズタトバコンボ」、「仮面ライダーW・サイクロンジョーカー」が召喚される。

「宇宙キター!!!」

「やっぱりライダーは助け合いでしょ!」

『「さあ、お前の罪を数えろ!」』

「ここは任せたよ」

ディエンドの言葉に「ああ、任せろ」とWが答えた後、ディエンドはサイトとロギアを連れて行く。

「なぜ私まで……」

「君にも色々聞きたいことがあるからね」

まずはこの世界のことをダイキはサイトに話し、次にロギアについて説明しなければならない。

彼はかつてこの星を宇宙からくる脅威から守り抜いた「グランセイザー」と呼ばれる12人の戦士の1人、「セイザータリ阿斯」のライバル的存在であり、絶対的な力を持つ「宇宙連合ウオフ・マナフ」の1人であり、ウオフ・マナフは星を破壊する宇宙工作員達を危険人物達だと判断し、彼等の母性には罪の無い者達もいる為攻撃はしないが星を破壊するのが目的の宇宙工作員達はウオフ・マナフの判断により連行され、必要あらばその場で死刑となるのだ。

「そのウオフ・マナフっていうのは……、話し合いはしなかったのか！？ 必要があれば死刑だなんて……」

サイトは言うが、人の姿に戻ったロギアはこう答える。

「話しあったに決まっている。交渉はしたが奴等はウオフ・マナフなど眼中に無い。その為交渉は決裂、捕まらない自信があるからな」

(どうにか、ならないのか……?)

ダイキはサイトを見て、少し笑みを溢す。

「彼も君と同じことを思うだろうね」

「彼?」

首を傾げるサイト。

「風上光、最初はそうでも無かったんだけど、戦う度に段々と戦うことを嫌いになっていった奴さ」

*

その頃、フェイトはある洞窟の近くで気絶しており、変身も解けていた。

「う……んっ？」

目を覚ましたフェイトは幸い怪我はしていないがその洞窟で人の気配を感じ、その奥に行ってみる。

丁度ダイキに渡されていた懐中電灯を使い、洞窟の中を進んで行く。

「バルディッシュ、念のために何時でも戦える準備していてね」

『イエス・サー』

そしてその奥にはあの戦闘員達と酷似した服装をしていたが、顔は地球人とほぼ変わらない男性がいた。

「ぐっ……」

男性は戦闘員と同じ様に光弾をフェイトに放ってきたがフェイトは

とっさに魔法によるバリアを展開して防ぐ。

「きゃっ!?!」

「地球人は変わった力を使うんだな……うぐっ!?!」

男性は腕を抑え、そのまま気を失い、それを見たフェイトは持っていた包帯で男性の手当てをし始める。

「怪我してるんだ……!」

数分後、男性は目を覚まし、丁度水を汲みに行っていたフェイトが戻ってきた。

「目が覚めたんですね」

男性の姿を見てフェイトは安心した表情をする。

「お前、ここへ来る途中俺とよく似た格好をした奴等に襲われなかったのか?」

「襲われました、だから、事情を聞こうと思って。あなた達はなにが目的でこの星にきたんですか?」

男性はしばらく黙りこんだ後、口を開いた。

「俺は同族を止める為にここへ来た。この星を侵略しようとする『ケルス』を止める為に」

フェイトが「ケルス?」と尋ねると男性はあのロボット戦闘員を操っていたボスだと答える。

「だがこのザマだ」

「そう、なんですか……」

「信じるのか？ 俺が嘘をついているとか思わないのか？」

男性の言葉にフェイトは首を横に振る。

「真面目に答える！！ 本当どうなんだ！！？」

男性は怒鳴るがフェイトは全く動じていなかった。

「真面目です。 理屈なんて無い、でもなんだかあなたは嘘をついてるように思えないし、それに……あなたと仲良くしたいと思ったから」

フェイトは男性に微笑みかける。

（こいつ、本気で言ってるのか？）

フェイトには念話を使う力があるが、フェイトと同じ魔導師から離れ過ぎている上にダイキ達は魔力を持っていない。

携帯を持っていたが、先程落ちた時に無くしてしまった様だ。

要するに連絡手段が今は無いのだ。

「そういえばあなたの名前聞いてませんでしたね、私はフェイト・テストロツサつて言います。 あなたは？」

「……『ケサム』」

フェイトはそこでケサムの腕についているブレスレットの様なもの

を見つめるとランプがついていた。

「それは？」

「これはいざという時に武器にもなるし、空間を瞬間移動して別の星へ行くことが出来る。それで今は充電中だ」

だがその時、フェイトの前を緑の光弾が通過した。

「っ!？」

「なにをしているケサム？」

洞窟の入り口前にはケサムと同じ格好をした男性がそこにいた。

「ケルス……!」

この男性こそがケサムが言っていたケルスであるのだが……。

「起爆装置を持っているのは貴様だろうか？　こんな所で油を売るな」

「ああ、すまないな」

ケサムは立ち上がり、ケルスの元へ行く。

「ちよつと待って!!　ケサム、あなたケルスを止めるんじゃないかなったの……?」

「そんなのは正体を隠す為の嘘だ。この装置はこの先の谷にある爆弾起爆装置だ。　作動すればこの星は無に返る」

無表情に言うケサム。

「私を騙したの？」

「星を汚し、文明を破壊する種族を抹殺する。それが俺達の使命だ」

ケサムは銃型の武器をフエイトに向ける。

「お願いやめてください！！ 確かに人間は地球を蝕んでるかもしれない、でもそれに気付いて過ちを正そうとする人達も沢山います！！」

「所詮は空しい努力だ」

「空しいのはあなた達の方、無からは何も生まれない！！ 必要なのは互いに信じあえる心です、私があなただを信じた様に！！」

その言葉にケサムは一瞬だけ表情が戸惑い表情に変わった。

「なにをしているケサム！！ そんな小娘の言う事を鵜呑みにするのか！？」

だがそこへサイトと変身したロギア、ディエンドが現れる。

(やっぱり宇宙工員ケサム……)

サイトは自分のいた世界と同じ顔をしたケサムを見る。

「お前達の爆弾はもう見つけてある」

「だがいかにウオフ・マナフの資格でもあれを止める事は地球人にも出来ない。ケサム！！」

ケルスはケサムを呼ぶが、その場から動こうとしない。

「ケサム！！」

ケサムはそこでハツとなり、ケサムとケルスは本来の姿である「宇宙作業員ケサム」と「宇宙作業員ケルス」の等身大の姿に変わる。

「はあ!!」

ロギアはケサムに殴りかかるがケサムはロギアの拳を受け止めて逆に殴りつけ、さらに追い打ちをかけようと攻撃をロギアに仕掛けるがロギアは素早く廻し蹴りをケサムに炸裂させる。

「りゃあ!!」

「ぬわあ!?!」

ケルスは腕から光弾を発射するがディエンドは「バリア」のカードでバリアを張り、サイトはディエンドの肩を踏み台にジャンプしてデルフをケルスに振りかざす。

「ぐわああ!!?!」

「大人しく自分の星に帰るんだ!!」

サイトがケルスとケサムに言うが2人はそんなことを聞く耳を持たない。

「等身大では本来の力の全てを發揮出来ないか」

「だったら……」

ケサムとケルスは洞窟から抜け出し、2体は巨大化する。

さらにこの2体だけでは無く、戦闘員合計10体が巨大化して現れた。

サイトは腕にあるウルトラゼロブレスレットからメガネ型のアイテム「ウルトラゼロアイ」を出し、目に装着。

「デュワツ！！」

「ダイロギアン！！」

「デイガール！！」

サイトはランと同じ光の戦士、「ウルトラマンゼロ」に、ロギアは巨大な漆黒ロボ「ダイロギアン」を呼びだして乗り込み、ダイキは「ウルトラマンデイガル」に変身。

「ケサムウウウウ！！！！」

フェイトはケサムの名を悲しみに満ちた声で叫び、一瞬ケサムはフェイトを見るがすぐに戦う意思を見せる。

「頼むから星に帰ってくれ！！ もうこんなことはやめるんだ！」

ゼロはケルスとケサムに訴えるが、無言でケサムは光弾をゼロに打ち、ゼロは避けるがケルスがゼロに素早く接近して殴りつける。

「デュア！？（やっぱり戦うしかないのか……）」

ゼロはケルスへと飛びかかり、ケルスと掴み合いになるがケルスはゼロを突き離して蹴りを繰り返すが、同時にゼロの蹴りもケルスもぶつかり合う。

「シユア！」

「フン！！ ハア！！」

互いに殴り合いが続き、その途中でゼロとケルスは背中合わせになるが、ゼロとケルスは互いに距離をとり、ケルスの放つ緑色の衝撃波をゼロは喰らい吹き飛ばされる。

「デュワアア!!?」

すぐに立ちあがったゼロだが、そこにはケルスの姿は無かった。

(どこだ……?)

辺りを見回すがケルスの姿は見えない、するとその時、地中からケルスが現れてゼロの足を掴み持ち上げて地面に2回叩きつけた後、放り投げる。

「デュツ!!?」

一方、ディガルは爆弾をケサムに渡さない様に戦っていた。

だが爆弾を守りながらの戦いではディガルが不利な状況となっており、爆弾をなんとか隠して万全な状態でディガルはケサムと戦う。

『ウルトラライド・ゼノン!』

光の国の戦士、「ウルトラマンゼノン」の姿へと変わるディガル。

「他のウルトラマンに変身した……」

ゼロが呟き、Dゼノンはケサムの腹部を3発殴りつける。

つてしまい、ケサムの腕から出す赤い糸の様なものでディガルを拘束し、空中に浮かせる。

身動きが取れないディガルに赤い光弾をケサムは放つ。

「デュアアア!!?」

ケサムはトドメを刺そうと強烈な衝撃波を放とうとしたが……。

「ケサム!! 星と文明が共存出来る道はきつとあります!! あなたともきつと分かり合える! あなたを助けたこと後悔してない。

例え、星の破壊者だとしても!!」

ケサムは攻撃の手をやめ、フェイトを見降ろすとフェイトは涙を流しながらケサムに訴えていた。

その際にディガルはケサムの技から抜け出し、地上へと降りる。

ケサムはディガルを見るとディガルはゆっくりと頷き、ケサムは腕にある起爆装置を停止させようとする。

「貴様、裏切るつもりか!？」

「ケルス、もうこんなことはやめるんだ」

「……………」

ケルスはケサムに対し頷く。

(随分とあっさりだな…………?)

(隙を見せたな、ケサム!)

ケルスはケサムに急接近し、彼の腹部を貫いた。

「ぐはああ!!?」

「裏切り者は死あるのみってやつだ!」

ケルスはケサムの起爆装置を奪い取る。

「もう時間は無い! 後60秒で爆発する!」

「ッ!」

急いでディガルは爆弾を掲げて空中へと飛び立ち、宇宙ならば爆発しても大丈夫な為宇宙へ向かうのだが……。

「バカが、もう間に合わん!!」

「ぐう……、ケルス!」

ケサムは力を振り絞り、ケルスの背中を光弾で撃った。

「ぬわああ!!?」

(今だ!)

ケサムは起爆装置を奪い返したのだが、ケルスは光弾をケサムの傷口に向けて放ち、彼の腹部を光弾が貫く。

「ぬがあああ!!?」

「ケサム!!」

膝を突き、ケサムは地球人と酷似した姿に戻り、青い血を流しながら起爆装置の起動を停止させた。

「ケサム!！」

フェイトがケサム倒れているケサムに駆け寄り、彼の手を握る。

「俺と……したことが……」

フェイトは首を横に降り、涙を流しながらも彼にまた微笑みかけた。

「あなたは過ちを正せた。それは悪いことなんかじゃない」

ケサムは一瞬フェイトに笑いかけた後、目を閉じて息を引き取った。

「ッ! ……ケサム……」

「くそがああああ!!! ケサムの奴よくもよくもおおおお
おおお!!!!!」

ケルスが雄叫びをあげるかのように叫び、フェイトは自分の拳を強く握る。

「……お前だけは……許さない……!!」

フェイトはケルスを睨みつけ、ブイコマンダーを口元へと近づける。

「タイムファイヤー!！」

タイムファイヤーへと変身したフェイトは再びブイコマンダーを口元に近づける。

「ブイレックス!！」

空間が割れ、そこから銀色のティラノザウルスの様な恐竜のメカ「ブイレックス」が現れる。

【ギィアアオオオオ!!!】

「レックスレーザー!!!」

両肩に装備されたレーザー砲からレーザーがケルスに放たれる。

「ぐぬう!?!」

ゼロスラッガーを構えたゼロがケルスへと向かって行くが残りの戦闘員達に阻まれる。

しかし、ゼロはそのまま周囲の敵を一気に切裂く「ゼロスラッガーアタック」を炸裂させ、戦闘員達を全滅させた。

「ボイスフォーメーション! ブイレックスロボ!!!」

ブイレックスが変形し、人型ロボット「ブイレックスロボ」となる。

「私が決める、ゼロは手を出さないで!」

ゼロはタイムファイヤーに対して頷き、ブイレックスロボに次の指示を出す。

「レックスパンチ!」

ブイレックスの片腕がロケットパンチの様に飛び、それがケルスに直撃。

「ぐはあ!?!」

「リボルバーミサイル!?!」

さらにもう片方の腕に装備されたミサイル「リボルバーミサイル」をケルスに発射し、全段命中。

「ぐわあああ!?!? この!?!」

ケルスは飛び上がり、ブイレックスロボに攻撃を仕掛けるが……。

「マックスブリザード!?!」

両肩からブイレックスロボは光線「マックスブリザード」をケルスに放ち、直撃を受けたケルスは「圧縮冷凍」され、人形のような姿になり地上へと落ちた。

「ぐわあああああ!?!?!?!」

「タイム・アップ」

その後、ロギアはケルスを回収。

圧縮冷凍の技術はウオフ・マナフにもあるらしく、ロギアはケルスを回収して元の姿に戻した後裁判にかけて宇宙へと帰った。

その後、サイトはダイキに自分の世界に帰る方法は無いかと尋ねる。

「ああ、僕のディエンドライバーがあれば君を元の世界に帰すことは出来るけど……、その前に」

「はい?」

海鳴市へと帰ったダイキとフェイトはサイトを連れて来ていた。

「別の世界と言えども久しぶりの地球だなあ」

ダイキはある公園でラン達を集めて、サイトに会わせた。

「お前が……異世界のゼロか？ 俺は諸星ラン、お前とウルトラマンゼロだ！」

サイトは目を丸くした、何故ならこの世界のゼロの格好がまんま少年の姿で小学生くらいだったからだ。

「まだ子供……？」

「あつ、いや、俺もまさか地球年齢でまだこの位だったとは知らなくて……。まあ、同じゼロ同士、仲良くやるっぜ？」

「ああ！」

その後、ちゃんとサイトをダイキは元の世界へ送り届け、後で分かったのだが、サイトがこの世界にきたのは世界が一時的に歪みが発生したかららしい。

「見つけたぞ、世界の歪み！」

「ラン、声ネタはいいから帰るよー」

ランはなのはに引っ張られて帰って行った。

第3弾 『星の破壊者』（後書き）

グラマギにロギアが登場出来そうに無いのでこちらに登場させました、ダイロギアン共々。

因みにフェイトは「タイム・アップ」と言ってますが、これはフェイトが「ジ・エンド」というイメージがアレなのでタイムレンジャーと同じ台詞にしました。

ここではあの戦闘員達はロボ扱いに。

特別編 『序』 (前書き)

この特別編はリリカルなのはHEROSのレッツゴー仮面ライダー版的なものです。

そしてパラレル設定ですのでこの特別編には光も登場します。

特別編 『序』

これは「リリカルなのはHEROS」の世界とは変わらない世界の物語、しかし、唯一違うのはこの世界に歴代の「仮面ライダー」がいることである。

そして彼等が中学3年辺りの物語。

ある人気の無い場所でモグラをモチーフとした怪人、「モルイマジン」が黒い漆黒のボディに眼が青い「仮面ライダーダークデイケイド」ともう1人はデイケイドに似ているが眼は緑で身体はマゼンタの「仮面ライダーデイケイド」が戦っていた。

「電王が戦っている怪人！」

「なんでこんな所に！」

ダークデイケイドはモルイマジンの攻撃を受け流し、剣型の「ダークライドブッカーソードモード」でモルイマジンを斬りつける。デイケイドはモルイマジン2体をダークライドブッカーを白くした「ライドブッカーソードモード」で切裂くとライドブッカーからカードを1枚引き抜き、腰にある白いベルト「デイケイドドライブ」の中央に装填。

『カメンライド・電王！』

デイケイドは桃のような仮面に赤いアーマーを纏った姿「D電王ソードフォーム」に変身し、モルイマジン1体の肩を掴むと頭突きを喰らわせる。

「はああー!!」

「ぐおお!? で、電王!?」

D電王とダークデイケイドはモールイマジンを追いこんで行くが途中で2体しかいないことに気付いた。

「1体いないぞ?」

「えっ……?」

すると背後からモールイマジンがD電王の背中を腕に装備された爪型の武器で攻撃し、D電王は背中から火花が散る。

「ぐわああー!?」

その衝撃でD電王は倒れこみ、素早くもう2体のモールイマジンがD電王を立ち上げらせる。

「くっ……」

「光!!」

ダークデイケイドが助けようとするがモールイマジン1体が阻む。

そしてD電王を捕えていた2体のモールイマジンはD電王からデイケイドライバーを引き剥がす。

「ぐっ、しまった……!!」

そして変身が強制解除されてしまい、青年、「風上光」の姿に戻る。

「デイケイド、お前の身体を使わせて貰う!!」

光の身体が真っ二つに割れ、その中は緑色に輝いておりモールイマジン3体はその中に飛びこんだ。

その後、光の身体は元に戻り、ダークデイケイドは変身を解き、装着者は「風上龍夜」という青年で光の兄である。

彼は光に駆け寄り、「大丈夫か?」と尋ねる。

「う、うん、ごめん。僕のせいでイマジンが過去に」

「気にするなって!!」

とそこに……。

「龍夜ー!!」

青い髪をした女性「ライハ」が龍夜達に駆け寄る。

そして駆け寄るなり龍夜に抱きつくライハ。

「うわっ!?!?!いきなり抱きつくなってば?!?!」

「ほんとは嬉しいくせに」

光は2人のやりとりを微笑ましく見ていたが、すぐにそんな場合で無いことを思い出す。

「いい、急いでモモタロス達に連絡しなきゃ!」

「良太郎は愛里さんと兄妹水入らずで温泉行ってるからな」

イマジンは過去に行き、歴史を変えることが目的。

だが過去に行けるライダーは「仮面ライダー電王」というライダーと、電王タイプのライダーのみなのである。

ライハも電王系ライダーだが過去に行く為の電車を持っていない。

その時、空中から巨大な電車……時の電車「デンライナー・ゴウカ」が現れ光と龍夜とライハの前に停車するとそこから1人の金髪の青年「野上幸太郎^{のがみこうたろう}」と青い怪人「テディ」が降りてきた。

「デンライナー？」

とライハは首を傾げる。

「あれは確か、良太郎さんの孫の……」

幸太郎は金色のベルト「NEWデンオウベルト」を腰に巻きつけて黒いパス、「ライダーパス」をベルトの中央にかざす。

「変身」

『ストライクフォーム』

すると幸太郎の姿は変わり、青い姿の未来のライダー、「仮面ライダーNEW電王」に変身した。

「それじゃ、いっちょ始めますか」

「うむ」

ディケイド・ダークディケイド・電王・オールライダー

レッツゴー仮面ライダー

始まります。

特別編 『序』（後書き）

世界観的には歴代ライダーがいること以外リリカルなのはHEROSと変わらず、光や龍夜としたオリキャラ組などは別の世界からきました。

光達は何名かのライダー達とは知り合いです。

特別編 『40年前』

NEW電王が光の元までやってきたカードらしきものを彼にかざすとそこにモールイマジンが映り、モールイマジン達が飛んだ過去の先が40年前であることが分かった。

「なんで光に40年前もの記憶があるんだ？」

NEW電王は疑問を言いながらも龍夜達に過去に行つてモールイマジン達を倒して来ると言い、デンライナーに乗りこむ。

「後は私達に任せてくれ」

テデイが光達にそれだけ伝え、テデイもデンライナーに乗りこむ。

「兄さん、僕達も行くよ」

「はあ！？ 幸太郎達に任せれば……」

だが光は首を横に振つた。

「僕のせいで過去に行つたんだ、責任を取りたい。それに、僕等デイケイドタイプのライダーなら過去に干渉しても問題ないと思う」

光の言う通り、デイケイド系のライダーは恐らく歴史の干渉などは受けないだろう。

それにデンライナー乗車に必要なチケットも持っている為、ライハとチケットを共有して龍夜、光、ライハはデンライナーに乗りこんだ。

*

デンライナーの中、その中では白い服を着た女性「ナオミ」がコーヒーを入れており、赤い鬼の怪人「モモタロス」と青い亀の怪人「ウラタロス」が座席に座っており、黄色い熊の怪人「キンタロス」は眠っており、紫色の怪人「リュウタロス」は絵を描きながら遊んでいた。

「でっ？　なんでオメー等がいるんだよ!？」

モモタロスが座席に座っていた光達に詰め寄る。

「いや、一応、チケット持ってるし……」

龍夜が苦笑いしながらチケットをモモタロス達に見せる。

「それに僕のせいで過去に行っちゃったから、どうしても手伝いた
いんだ」

光の真剣な表情を見るモモタロス。

「でも、流石に過去に干渉するのはね」

「ディケイドやダークディケイドならば恐らく問題は無いでしょう」

突然後ろから声が聞こえ、光、龍夜、ライハが振り返るとそこには杖を持った男性が凄く無茶苦茶近くにいた。

「「「うわああああ！！！？」「」」

光達3人は凄く驚いてしまう。

「オーナー、何時の間になっていたの？」

ウラタロスの質問に答えず、オーナーは続ける。

「デイケイド系のライダーは世界の『理』をも破壊します。それならば恐らく現代に悪影響は出無いでしょう」

実際に「かどやつかさ門矢士」という光とは別のデイケイドが電王と共に過去の世界で何度か戦ったことがある。

その士は別の世界に行ってしまったているが。

「た・だ・し！ その君にはデンライナーに残って貰います。幽汽の力があると言えども……」

「ええ〜！？ なんで僕だけ！！？」

不満な声を漏らすそこにウラタロスがライハの手を取り。

「まあまあ、彼等が帰ってくるまで僕とお茶でもしようよ？」
「またナンパかスケベ亀」

すると突然キヤキツという音が聞こえ、ウラタロスが「んっ？」と

振り返るとこちらを物凄い形相で睨む龍夜がダークライドブッカー
ガンモードを突きつけていた。

「離せ」

「ちよつとちよつと！ 悪かったって、ごめんね」

ウラタロスはライハから手を離す。

「まあ、僕が龍夜以外に惚れるなんて有り得ないもんね！」

胸を張るライハ。

「じゃあさじゃあさ！ おねーちゃん一緒に絵でも描いて遊ぼう！」

「んっ？ それならいいよ」

子供っぽいライハのことだ、普通にそれくらいは承知するだろう。

「じゃあ、俺と光と幸太郎であのモグラ野郎潰してくるから、待つ
てるよ」

ライハの頭を優しく撫でる龍夜。

「はい」

因みにリュウタロスが今描いている絵は……いかにもドSっぽい顔
をして刀を腰に差している黒い服を着た男性でなぜかバズーカを構
えている絵。

「グオ〜！！！」

「熊つるせえよイビキ！！！」

「コーヒーどっぞ〜」

ナオミが光、龍夜、ライハにコーヒーを出す。

「あっ、どっぞも」

*

そして40年前の過去の世界では港の辺りでモールイマジン達が生きており、そこに丁度デンライナーが到着してデンライナーの先端の中央部が開き、そこから電王のバイク、「デンバード」に乗ったNEW電王が飛び出すとそのままモールイマジン3体を跳ね飛ばす。

「「「ぎゃああああ！！！？」」「」」

「テディは剣型の武器「マチエーテディ」になりNEW電王の背中に装備されている。」

「じゃあ行くよ、テディ？」

『ああ』

マチエーテディを手にとるとNEW電王はデンバードから降りてモールイマジン達に向かい走り出す。

「はあああ！！！！」

マチエーテデイを使い、モールイマジン達を斬りつけて行くNEW電王。

「「ぎゃあああ！！？」」

もう1体のモールイマジンにもマチエーテデイを振りかざしたがモールイマジンを受け止めてそのままモールイマジンはNEW電王を抑えつけて他2体のモールイマジン達がNEW電王の背後から襲いかかる。

「「きえええ！！！」」

だがそこに……。

『アタックライド・ブラスト！』

複数の銃弾がモールイマジン2体に降り注ぎ倒れこむモールイマジン2体。

「うおおおお！！！」

そこにデイケイドとダークデイケイドが現れて2人同時に起き上がったモールイマジン2体を蹴り飛ばす。

「「うおー！？」」

NEW電王も自分を抑え込んでいたモールイマジンを振りほどき、殴りつける。

「なんで来たのさ？」

「だって、僕のせいですからせめてなにか手伝いたくて……」

上からNEW電王とディケイドが喋り、「しようがないな」とNEW電王が呟き、マチエーテデイが「カウントは？」と尋ねる。

「じゃあ久しぶりに行ってみようかな。 10、いや、8でいい」

ライダーパスをベルトの中央にかざすと「フルチャージ」という電子音が鳴り、マチエーテデイの刃が輝き、マチエーテデイで敵を切れく「カウンタースラッシュ」という必殺技をモルイマジンに炸裂させる。

フルチャージしてから必殺技を決めるまでマチエーテデイが敵を倒すまでのカウントを数え、8から0になった時、丁度モルイマジンはカウンタースラッシュを受けて爆発した。

「はああああ……！」

「ぐわああああ……!?!?」

『お見事!』

ディケイドはモルイマジンの爪型の武器で叩きつけられるがなんとかモルイマジンから距離をとり、カードを1枚取り出してドライブバーに装填。

『アタックライド・スラッシュ!』

ライドブッカーをソードモードにして斬れ味のよくなったライドブッカーでモルイマジンを斬りつける。

「はあああ!!」

「ぐおお!!? この野郎!!」

モールイマジンがデイケイドに突っ込んで来るがデイケイドに蹴りつけられ、ライドブツカーで切裂かれる。

「やあああ!!」

「ぬわあああ!!!?!?」

『ファイナルアタックライド・デイデイデイケイド!』

デイケイドの前に10枚の3Dゲートが現れてデイケイドは跳びあがり、それを貫きながら炸裂させる必殺キック「デイメンションキック」をモールイマジンに繰り出す。

「これで……!! はあああ!!!」

しかし、キックは決まると同時にモールイマジンの腕がデイケイドの腰にあるデイケイドライバーに辺り、デイケイドライバーと左腰につけていたライドブツカーが吹き飛ばされてしまい、光も少しモールイマジンの爆発に巻き込まれて吹き飛ばされてしまう。

「うわああ!!!?!?」

「光!! 大丈夫か!?!」

戦いを終わらせたNEW電王が光に駆け寄る。

「あつ、はい、僕は大丈夫です」

苦笑いしながら自身の無事を伝える。

ダークディケイドと最後のモールイマジンとの戦いではダークディケイドが優位に立っており、ディケイドと似た必殺キック「ダークディメンションキック」がモールイマジンに決まり、モールイマジンは爆発し倒された。

「なんか俺のだけやけに短くないか戦闘シーン!？」

「まっ、もう用は済んだし、デンライナーに戻るっ」

変身を解いた幸太郎に頷き、光はライドブッカーとディケイドライダーを拾ってデンライナーに戻って行った。

しかし、その後ディケイドが「コンプリートフォーム」という最強の姿になる為のカードがライドブッカーから落ちていたことに光も、誰も気付いていなかった。

そしてそのカードを拾い上げる黒いタイツとマスクを着た男性がいた。

「イーツ？」

*

デンライナーに帰った光達。

しかし、デンライナーの中では……。

「死ね土方ああああ!!!」

「勇者様こちらであります!!!」

などとライハとリュウタロスがやっていたりしていた。

「「「なにやってんの?」「」」

光、龍夜、幸太郎が同時に喋る。

「俺にも分からん」

何時の間にか起きていたキンタロス。

そこで本人達になにをやってるのか尋ねると……。

「「声ネタ!!!」」

となぜか楽しそうに答えてくれたライハとリュウタロス。

それはそうと、取り合えず現代に光達は戻って来てデンライナーから降りる。

「取り合えず手助けサンキュー、じゃあまた」

幸太郎が礼だけを言い、そのままデンライナーは走り出し、消えて行った。

「これからどうしようか? んっ? どうした龍夜?」

「兄さん?」

光とライハは龍夜の様子がなにかおかしいことに気付く。

「んっ？ あっ、いや、なんか静かすぎる気がしてさ……」

そこにフードを被った女性が歩いて来てすれ違っただが。

「おい」

龍夜が女性の腕を掴む。

「今、すれ違う時になんか光から奪ったろ？」

「ッ！！」

女性は龍夜の掴んでいる腕を振り払うとその際フードの中の顔が誰か3人には分かった。

「……フェイト！！？」「」「」

金髪の女性であり、光の恋人である筈の「フェイト・テストロッサ」がこちらを睨みつけて走り出す。

因みに、盗まれたものは光のデイケイドライバーである。

「なんで今日僕こんなについてないの！！？」

「幸太郎の不幸が感染したんじゃない？」

兎に角、3人はフェイトを追いかける。

彼女を追いかける内にどこかホームレスの溜まり場のような場所に

辿りつく光達。

「きゃっ!?!」

だがその時フェイトは転んでしまい、デイケイドライバーを取り返すチャンスだと思ったがフェイトがデイケイドライバーを投げてその投げた先にはフェイトと同じ金髪だがいかにもツンデレそうな女性「アリサ・バニングス」と紫の長い髪の女性「月村すずか」がおり、2人に投げ渡したのだ。

「受け取ったわ!」

「あっ! この!!! 光、お前はフェイトを!」

「待ってよ!!!」

龍夜とライハがすずかとアリサを追いかけるが光は転んだフェイトに駆け寄る。

「大丈夫? 怪我してない?」

「近寄るな!!!」

フェイトは光を突き離し、光は眼を見開く。

「えっ……?」

フェイトはこちらを睨みつけている、しかも普通に睨みつけているのではない。

その眼には、怒り……恨みといったものが籠っているものだった。

＊

龍夜とライハは逃げるすずかとアリサを追いかけていたのだが、途中、突然パトカーが2台やってきて2人を阻んだ。

車から警察官が出てくる。

「ちょ、ちよつとなんだアンタ等!?!」

龍夜が言うが、いきなり警察の1人に殴られた。

「ッ!?!」

「なにするんだよ!?!? それでも警察か!?!?」

ライハが文句を言うのだが、警察の1人は「黙れ」と言い返す。

「お前達を逮捕する、お前達も奴等の仲間だろ?」

「はあ!?!?!?」

なにも悪いことをしていないのになぜ逮捕されるのだろうか?

龍夜とライハは冗談じゃないと思い、警察達を振り払って逃げようとする2人だが、その時警察達は服を脱ぎ、その正体は先程過去の世界で登場した黒いタイツの男性、「シヨツカー戦闘員」であり、警察達のリーダー的立場である2人はステンドグラスの馬の怪人「ホースファンガイア」と緑色で左手に缺がある「ガニコウモリ」に

変わる。

「なに!?!」

「どど、どうなってんの!?!」

龍夜はダークデイケイドライバー、ライハは中央が金色のベルト「ユウキベルト」を腰に装着。

「変身!?!」

龍夜はカードをドライバーの中央に装填して「仮面ライダーダークデイケイド」に、ライハは黒く、線路のマフラーのようなものを首にかけて「仮面ライダー幽汽スカルフォーム」に変身した。

「なんだと? 仮面ライダー?」

その時、パトカーの中からまた2人、男性が降りてきた。

「まさかまだショッカーに刃向かう仮面ライダーがいたとはな」

「でも、それなら俺達がやることは1つだけ」

その2人とは、仮面ライダーカブトである「風間キョウスケ」と仮面ライダーイクサである「坂本大翔」である。

「お前等……!」

大翔は「イクサベルト」というベルトを装着しており、イクサナックルというものを持ち、それを左手に押しつけた後、ベルトに装着すると大翔は白い装甲で顔が十字の「仮面ライダーイクサセーブモード」に変身し、キョウスケは銀色のベルト、「ライダーベルト」

を腰につけており、赤い機械的な虫「カプトゼクター」を装着するとキヨウスケは銀色の装甲でカプト虫の幼虫を思わせる「仮面ライダーカプト・マスクドフォーム」に変身した。

イクサの十字の顔が開き、赤い両目が出現しイクサはセーブモードから本来の力を発揮する「バーストモード」になる。

カプトはカプトゼクターの角を反対側に引っ張ると装甲が跳び、赤い装甲でカプト虫の成長を思わせる「仮面ライダーカプト・ライダーフォーム」に変わった。

「その命、神に返しなさい」

「返すな、ひっ捕らえるんだライダーを」

カプトとイクサはゆっくりとダークディケイドと幽汽に近づいてくる。

「はあ！？ ちょ、ちよつと………！」

「どうしちゃったのさ2人とも！！？」

カプトもイクサも聞く耳持たずにダークディケイドと幽汽に襲い掛かった。

特別編 『敵は仮面ライダー』（前書き）

今回色々とスピリッツのネタがあったり。

特別編 『敵は仮面ライダー』

イクサとカブトはダークデイケイドと幽汽に襲い掛かり、イクサは「イクサカリバー・カリバーモード」という剣型の武器を手に幽汽に斬りかかる。

「はあああ!!」

「ちょ、なにすんだ!？」

咄嗟に幽汽は剣を使いイクサの攻撃を防ぎ、イクサに文句を言うがイクサは答えずに幽汽から距離を取りイクサカリバーを銃型のガンモードに変形させ、幽汽を撃ちまくるイクサ。

「うわあああ!!?」

「ライハ!!」

ダークデイケイドが幽汽の元に駆けつけようとするもそこにカブトが阻む。

「お前の相手は俺の筈だが？」

「どうしちまつたんだよ、キョウスケ、大翔!!」

カブトは左腰を叩くと目にとまらぬ超スピードで動く「クロックアップ」を発動。

『クロックアップ』

クロックアップを使ったカブトがダークデイケイドを殴り、蹴りと攻撃していきダークデイケイドは倒れこむ。

「言って分からないなら！」

ダークディケイドはカードを1枚ダークライドブッカーから取り出し、腰のドライバーに装填。

『フォームライド・アギト！ フレイム！』

感覚に優れた姿である胴体と左手が赤くなった龍のようなライダー、
「Dアギト・フレイムフォーム」に変身したダークディケイドは剣型の武器「フレイムセイバー」を構える。

「……そこだッ！！」

フレイムセイバーを振りかざすとフレイムセイバーの刃はカブトを捕えて斬りつけた。

「ぐわああああ！！！！？」

幽汽はイクサに向かい走って行き、イクサはイクサカリバーで幽汽を撃ちまくるが剣を盾の様に使って防ぎながらイクサに接近し跳び蹴りを喰らわせた。

「やああー！！」

「うわあー!？」

「ライハー！！ 逃げるぞ！！」

ダークディケイドの姿に戻り、幽汽の手を退いてそこから逃げだす2人。

「逃がすな、追え!!」

ガニコウモリの命令で戦闘員達が「イーッ」と返事をし、2人を追いかけた。

「逃がしたか」

「なに、すぐに捕まるさ、ライダーは俺達だけじゃないからな……」

イクサとカブトの順に喋り、ダークデイケイドと幽汽は人気のない場所を走っていた。

「はあ、はあ、なんであいつ等俺達を……!!」

「分かんないよ！ 取り合えず、光とは翠屋で落ち合う予定だし、そこに行こう！」

だが、彼等の前に新たな仮面ライダーが立ちはだかる。

赤く、胸には「S」と書かれたカブトを思わせる姿の「仮面ライダーストロンガー」が現れた。

「ストロンガー!?!」

「茂さん!?!」

「エレクトロファイヤー!!」

両腕のアームを擦り合わせて地面を殴るとそこから火花が散り、段々と素早くダークデイケイドと幽汽に向かってくる、ダークデイケイドは幽汽を押し退かし、ストロンガーの放った電撃を喰らう。

「龍夜!?!」

「ぐわああああ!!?!?!」

地面に倒れこむダークディケイド、幽汽はダークディケイドの元に駆け寄る。

「大丈夫？」

「あ、ああ、なんとかな……」

どうにか立ち上がるダークディケイド、しかし、そこに……。

「エレキ光線！！」

「電磁ナイフ！！」

雷の光線とナイフ型の武器が跳んで来たが、2人は光線をかわし、電磁ナイフは叩き落とした。

「まさか、ZXとスーパー1も!?」

そこに現れたのは赤い「仮面ライダーZX」と銀色のアリののような「仮面ライダースーパー1」である。

「一也さんと良さんまで！」

さらにそれだけでは無い、突然幽汽とダークディケイドの背中を何者かが攻撃したのだ。

「うわあ!?!」

振り返っても誰もいないと思っただが、姿を現した。

カメレオンのような緑の「仮面ライダーベルデ」と宇宙飛行士のよ

うな金色の「仮面ライダーフォーゼ・エレキステイツ」が「ステルスモジュール」と呼ばれるものを装備した2人のライダーだった。

「仮面ライダーフォーゼ、タイマンはらして貰うぜ!!」

「タイマンじゃないだろ」

フォーゼにツッコミを入れるベルデ、ダークデイケイドと幽汽はストロンガー、Z X、スーパー1、ベルデ、フォーゼに囲まれてしまったのだ。

しかし、その時……。

「デイベイーンバスター!!」

桃色の砲撃がダークデイケイドと幽汽の周りに放たれ、その際フォーゼ達は吹き飛ばされてしまう。

『うわああ!!!?』

「こつちです!」

声が出た方を見ると、ボロボロの服を着た茶髪の女性「高町なのは」が手招きをしていた。

「ライハ!」

「う、うん!」

変身を解いてなのはのいる方まで逃げる龍夜とライハ。

*

なのはについて行った先にあつた物は、ボロボロになつた翠屋だつた。

「えっ？　ここ、翠屋？」

「なのは、一体どうし……」

龍夜の言葉を遮つてなのはは「入って」と言い、中に入ると。

「「あつ！」」

アリサとすずかがおり、光とフェイトもいた。

しかし、なぜか光の頭の上にはタンコブが出来ており苦笑いを浮かべていた。

「どうした、それ？」

「いや、それが……」

どうやらフェイトが「触るなバカ！！」と言い、光の頭をバルディツシユの刃の無い部分で思いつきりぶん殴つたとか。

「うう、頭痛い」

「あなた達、わずかに残ってるライダーの人達なんですよ？」

首を傾げて尋ねるのは。

「なのは、ていうかお前等も、本当に俺達のこと忘れたのか？」

龍夜が尋ねるが、誰1人龍夜達のことを知らなかった。

「ていうか、その青い髪の人なんで私にそっくりなの！？ ワームとかじゃなさそうだし……」

「ワーム」とはカブトが戦っている怪人で人に化けるのが得意な怪人である。

確かにライハはフェイトに似ている、なんと言えればいいのか分からなく、アホの頭で考えていると……。

「少なくとも彼等は敵じゃないよ」

声がした方を振り返るとそこにいたのは「鳴神ダイキ」、仮面ライダーディエンドでウルトラマンディガルにも変身する青年だった。

「ダイキさん!!」

「やあ、君達がいけない間に大変なことになったよ」

どうやらダイキはなのは達と違い、光達のことを覚えていた。

「一体、なにがあつたんですか？」

光の質問にダイキは答える。

「光達は電王と一緒に過去に行ったね？ それが原因さ、光、コン

ブリートフォームのカードはあるかい？」

光はすぐにライドブッカーからカードを取り出し、コンブリートフォームのカードを探すが全く見当たらなかった。

「まさか……」

「そう、光はそれを落としてしまったんだ」

ダイキの話によるとショッカーがそれを回収し、首領に届けて首領の力によりライダーのような怪人のような存在である「ショッカーデイクイド」が生まれ、ショッカーデイクイドは全ての仮面ライダーの力を使える為に初代ライダーである「仮面ライダー1号」「仮面ライダー2号」を倒し2人を洗脳、その後の昭和ライダー達は1号、2号は「仮面ライダーV3」となる「風見史郎^{かみしろう}」と捕えて改造して洗脳、ライダーマン、X、アマゾン、ストロンガー、スカイ、スーパー1、ZX、シン、ZO、Jなどは本来の歴史通り、仮面ライダーとなったが1号、2号、V3がその後のライダー達を1人1人倒して行き、総力を拡大していき、そして昭和ライダーは平成に生まれたライダー達も次々倒して行き、殆どのライダーが洗脳されショッカーに加わってしまった。

さらに、それだけでは無い、数多くいる平成ライダーが負けた理由などは歴代のライダー達が戦ってきた組織、怪人などもいるせいである。

そして不自由無く生活している者はショッカー同盟として成り立っている者達である。

そうでない人間は今のなのは達のように暮らしている。

「デイケイドタイプを除けば洗脳されたライダーは殆ど、だけど、平成のサブライダーは少ないけど洗脳されてはいない」

それを聞いた光は驚愕の表情をしている。

「そんな……僕のせいでは……、僕があの時無駄に責任を感じ無かつたら……！」

「幾らデイケイド系のライダーだからと言っても、過去に今のものを置いてきてしまったら……！」

因みに、シヨツカーは異世界にも進出している為に時空管理局も今年に入って支配し、「八神はやて」や「闇の書の闇」などは皮肉なことに、それを利用してしようとしたシヨツカーと歴代の悪の組織がなんとかして抑え、「夜天の書」を利用してしようとするも、ダイキが助け出したらしく、今では守護騎士達と共に出かけている。

「要するに、この人のせいになっちゃったってこと？」

光を睨みつけるフェイト。

「ッ………！」

歴史通りならば仲のいい恋人同士である筈のフェイトに、怒りを込められた瞳で睨まれる。

「やめろ、フェイト！ 光だってこんなこと望んでやった訳じゃない！」

「フェイトちゃん………」

なのはがフェイトに止めに入ろうとするが。

「シヨツカーのせいで母さんは殺されたんだよ!? いや、シヨツカーのせいじゃない、この人のせいで……」

「そんな、プレシアさんも……? 僕のせいで……」

かなりのシヨツクを受けた光、その時、外からなにやら声が。

『お前達は完全に包囲されている!! 大人しく出て来い!!』

「そんな、シヨツカー警察に見つかった!?!」

ダイキが「ここは僕に任せたまえ」と言い残し、銃型の「ディエンドライバー」を取り出し、カードを装填して引き金を引く。

『カメンライド』

「変身!!」

『ディエンド!』

ダイキはシアン色の「仮面ライダーディエンド」に変身し、外に走り出した。

「僕はディケイド系だから、歴史の干渉は受けていない」

「頼んだ、ダイキ」

外に出たディエンドはディエンドライバーを発砲し、シヨツカー戦闘員を撃ち抜く。

警察官の2人が怪人ガニコウモリとホースファンガイアに変わり、ディエンドに走り出す。

*

外に出て逃げる光、龍夜、ライハ、なのは、フェイト、すずか、アリサ。

「光、元気出して！ きつとなんとかなるよ！」

ライハが励ますが、光は暗い表情をしたまま。

そこにショッカー戦闘員とZXに似た怪人の戦闘員達を引きつれた緑色の仮面ライダー、「スカイライダー」が現れる。

「スカイ……ライダー……」

龍夜は仕方が無いと思いつつ、ダークディケイドライバーを腰に装着し、カードを装填。

「変身」

『カメンライド・ダークディケイド！』

「仮面ライダーダークディケイド」に変身した龍夜はダークライドブッカーソードモードを手を持つ。

ライハ達は物影に隠れて様子を伺う。

「くっ……変身」

光もディケイドに変身し、ディケイドとダークディケイドは戦闘員達を蹴散らして行くが、スカイライダーが空中からダークディケイドを殴りつけ、殴り返そうとしたスカイライダーだが、スカイライダーは空中から飛び掛りながらチョップを放つ「スカイチョップ」をディケイドに炸裂させた。

「スカイチョップ!!」

「うああ!!?」

よろめくディケイドだが、仮面の下からスカイライダーを真っ直ぐに睨む。

「『それでも俺は人間を信じる、人間の為に戦う、俺は、それだけでもいい』」

「? なにを言っている?」

「覚えてませんか? スカイライダー、いや、『筑波洋』つくはひろしさん。

あなたが言った言葉だ。人間の醜い姿を分かっているながらもそれでも人間の為に戦う、そうでしょ?」

ダークディケイドは「光は本来の歴史の記憶を戻そうとしているのか」と思った時だ、バイクの音が聞こえてきて段々近づき、そこにバッタのような初代ライダーである「仮面ライダー1号」「仮面ライダー2号」が現れたのだ。

2人はバイクから降りると突然ディケイドとダークディケイドに襲い掛かる。

「ライダーパンチ!!」

2号のパンチがダークデイケイドに炸裂し、殴り飛ばされるダークデイケイド。

「ぐあああ!!!?!」

さらに背後から蜘蛛の糸らしきものがダークデイケイドに絡まった。

「なに!?!」

「お前は……」

ダークデイケイドを捕えたのは蜘蛛の怪人「クモロイド」である。

デイケイドは素早くライドブッカーソードモードでクモロイドの糸を切裂き、ダークデイケイドを解放したがその際に1号のチョップを肩に喰らうデイケイド。

「トオ!!!」

「ぐう!?!」

「ダブルキック!!!」

スカイと2号のダブルキックがダークデイケイドに叩きつけられ、膝を突くダークデイケイド。

「ぐうう」

「本郷さん、一文字さん、洋さん!!! 思い出してください!!! 本当の記憶を!!!」

クモロイドがデイケイドの背後を狙うが、ダークデイケイドの放ったダークライドブッカーガンモードの銃弾が直撃し、動きを鈍らせる。

ディケイドは急いでその場から離れ、ダークディケイドは跳び上がる。

「一文字さん、アンタこいつにトドメ差す時、この技使ったの覚えてないのかあ!!?」

片足を突きだし、クモロイドに突っ込んで行く。

「ライダーキックか？ 無駄だ！」

クモロイドが糸を吐きだし、ダークディケイドを拘束しようとするが、ダークディケイドは空中で身体を捻って回転させる。

「ライダーキック!!!」

回転させたスピードで糸は弾かれ、そのままクモロイドを貫き、クモロイドは爆発した。

「ウギャアアアア!!!?」

「はあ、はあ」

ディケイドもダークディケイドも相手が大先輩達となればやり辛いに本来の記憶を取り戻してくれないと流石に不味い、平成ライダー達も恐らくこんな気持ちだったのだろう。

先程の技を使っても2号はなんの反応もしておらず、Wディケイドの体力も限界に近づくばかり。

「万事休すってやつか……」

1号と2号がまず踏み出し、デイケイドとダークデイケイドに襲い掛かった時、バン！ と1号と2号に「なにか」が当たり、たじろく1号と2号。

振り返るとそこにいたのは骸骨の仮面に黒いスーツを着て銃を持った者がいた。

「仮面……ライダー？」

一瞬、仮面ライダーかと思ったが。

先程当たったものは「銃弾」だろう。

「本郷、一文字……」

1号と2号の本名を呟く骸骨の仮面の男。

「和也か……」

それは40年前、1号、2号と共に立ち向かった「滝和也^{たきかずや}」だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545x/>

リリカルなのはHEROS外伝

2012年1月6日19時50分発行